



規模が小さく、大学院学生と学部学生とは今よりも親密で、お互いにある程度知っていた。黒田さんと大学院同級の下沢隆さん（現埼玉大学理学部教授）はとくに学部学生の面倒をよく見てくれたので、私達はまず下沢さんに白羽の矢を立てた。数人で頼みに行ったところ、下沢さん曰く「ボクは適任じゃないよ。そういうことは赤松研の黒田か、島村研の櫻井に頼むといい。彼等はボクのなかの学の聖だから。」

「学の聖」とは耳慣れない言い方であったが、ピンとくるものがあった。というのは、それよりも少し前に行われた博士中間業績報告会で、学部3年生であった私も何人かの先輩の発表を見物していて、黒田さんの炭素（カーボンブラック）のX線小角散乱に関する研究発表が印象に残っていたからである。OHPはもちろんスライドすらなかった時代であるから、何枚もの模造紙にマジックインキ（あるいはまだ墨汁であったかもしれない）で丁寧に描かれた図、表、式を使つての発表であった。内容を理解できたわけではなかったが、なにかしら迫力のある話ぶりや学者らしい風格が印象深いものがあった。当時は学部男子学生はまだ全員学生服に身を固めていたが、大学院学生とくに上級生は背広姿であり、風体からして格段の差があった。

業績報告会の会場は化学旧館南側2階西端（化学本館に一番近いところ）にあった旧200号講義室で、その薄暗く天井の高い古風な造り、演壇でやや前かがみに話をしておられる新進気鋭の黒田さん、次々と質問を寄せられる先生方の後姿等々が懐かしく私の脳裏に浮んでくるのである。東大紛争より10年も前の古き良き時代であった。ちなみに、前記の「島村研の櫻井」とは現東北大学理学部長櫻井英樹教授のことである。

黒田さんは、博士課程を修了されてから半年間研究生をされたのち、カナダのNRCに2年間留学された。研究生のころ、学部学生実験の面倒も見ておられ、私は粉末X線回折の実験でお世話になった。新しい自記式回折計を使ったせいもあつ

て面白かったので、私は余計なことにまで手を出そうとして「そこまではしなくていいよ」と言われた記憶がある。今でも毎年5、6月頃に行われている学部4年生に対する研究室紹介は、当時は助手か大学院上級生が行っており、赤松研究室の紹介は黒田さんがされた。歯切れのよい分かりやすい話であった。そのせいかどうかは定かでないが、同級生26名のうち5名が赤松研で卒業研究をしたが、私自身はそのなかには加わらなかった。私は元々水島研究室志望であった。

黒田先生は研究に関する話の仕方が上手なだけでなく、他の諸々の問題についても、ご自身の意見を良いタイミングをとらえて独特の論理構成で展開される。内容的には常に物事の本筋を押えて話をされる。これは黒田先生の特技といってもよいであろう。このような特技と風格を兼ね備えておられるため、黒田先生はいろいろな任務を経験されたなかで、委員長や座長等を務められることが多かった。学内では、東大紛争の最中の1969（昭和44）年1月から1年間大学改革準備調査会委員長の重責を担われたが、このとき黒田先生はまだ30才台後半の助教授であった。理学部にとって重要であったのは、1975（昭和50）年4月から1年間理学部将来計画委員会委員長を務められ、1976（昭和51）年3月に「理学部将来計画委員会報告書、第1部（長期的な将来計画）、第2部（当面の措置について）」をとりまとめられたことである。この報告書は、それよりもさらに12年前の1964（昭和39）年3月に小谷正雄現名誉教授を委員長とする理学部将来計画委員会が出した報告書とともに、1990（平成2）年4月に理学部が公表した「理学総合大学院計画（理学院計画）」の礎石となった。現在進行中の大学院重点化は、これらの長期にわたる努力の積み重ねによって可能となったことを忘れてはならない。また、黒田先生は、1981（昭和56）年4月から6年間にわたって分光化学センター長として、同センターの高エネルギー物理学研究所放射光実験施設における研究活動の展開を推進された。さらに、

東京大学図書行政商議会委員長（1986年4月－1988年3月）及び東京大学附属図書館長（1988年4月－1991年3月）として東大ばかりでなく全国国立大学を対象とする図書館行政に貢献されたことは私達の記憶に新しい。

学外においては、日本学術会議会員を2期（11、12期）務められたほか、高エネルギー物理学研究所放射光実験施設には設置計画の推進段階から関係され、放射光実験施設委員会委員長（1978年3月－1982年3月）、同施設協議会副議長（1982年4月－現在）、高エネルギー物理学研究所運営協議会副会長（1990年6月－現在）として活躍してこられた。また、科学技術庁の大型放射光施設計画についても同施設整備連絡協議会座長として参画された。

研究面において黒田先生は、大学院学生時代のカーボンブラックの構造に関する研究に始まり、赤松研究室以来のお家芸となった有機電荷移動錯体の構造と電子構造の研究を深められた。その過程で、二つの方向への発展があった。第一の方向は、有機電荷移動錯体の電子構造を単結晶の反射スペクトルの精密測定にもとづいて論じるものであり、第二の方向は、この問題を内殻電子を通じてみるものであった。後者は黒田先生が教授に就任されてから推進されたもので、測定手段としてまずX線光電子分光がとりあげられ、次にSOR

を利用してのX線分光すなわちEXAFS、XANESの測定とその理論解析に進んでいった。また、これらの手法を表面解析に応用することも行われた。黒田先生が発展に尽力されたこれらの研究分野では、今後も世界中で活発な研究が展開されてゆくであろう。X線分光に関する国際会議が黒田先生を組織委員長として今夏神戸で開催の予定と聞く。

黒田先生は愛煙家だが、左党とはいえないようである。しかし、研究室のコンパのテーマソングは黒田節で、皆と肩を組んで歌われる。研究室員に対してかつては厳しかったときもあったが、最近はおもしろやさしい先生だそうである。趣味は室内楽鑑賞とドライブで、ドライブでは若い者そのけのスピードを出されるが、無事故・無違反を誇っておられる。凝り性で新しいものずきの面をもっておられて、ワープロが世の中に現れたとき、いち早くご自分で打っておられたことは周知のところである。お好きなテレビ番組は推理ドラマ仕立ての歴史物で、梅原猛氏の著作などにも興味をお持ちである。小さい頃から発明家か科学者志望で、一番食いはぐれのなさそうな化学を選んだとのこと。

黒田先生の益々のご活躍とご健康を祈る次第である。

